様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月 ３０ 日現在

機関番号：３２６４７
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2012～2015
課題番号：２４５３０９６９

研究課題名（和文）ケイパビリティ概念の教育哲学的検討とそれに基づくキャリア形成支援プログラムの開発

研究課題名（英文）The concept of Capability analyzed by Educational Pholosophy and Career development support program

研究代表者
走井　洋一（HASHIRII, Yoichi）

東京家政大学・家政学部・教授

研究者番号：３０３４７８４３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　4,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の成果は以下の3点にまとめられる。第1にキャリア形成におけるコミュニティとの関係の編み直しの必要性である。第2に自己認識の変容は自己と他者との協同によるものであるということである。なぜなら，個人化に堕していくからである。第3にこうした協同は語ることを通じて行われ，そのことによってお互いの世界認識の変容が生じるのである。

研究成果の概要（英文）：The results of this research are summarized in the following three points. First, in career development it is necessary to build relationships with community. Secondly, transformation of self-awareness needs cooperation with the self and others. Because it falls into the personalization. Thirdly, the cooperation is caused by narrative and transformation of world-awareness results from it.

研究分野：教育学

キーワード：教育哲学　就労支援　キャリア形成支援　コミュニティ　ケイパビリティ

1.　研究開始当初の背景

キャリア形成支援の現状を鑑みると，主に産業界からの要請や若年無業者やフリーター等の増大への対応という要求から生じており，就職という明確な目標への支援が中心となっているといってよい。こうした動向は，現在，若年層のキャリア形成支援の中核的な役割を担っている地域若者サポートステーション（以下，サポステ）において，その評価指標として利用者の利用開始から 6 ヶ月後の進路決定率を用いていることからも傍証される。しかし，キャリア形成の途上で困難を抱えた人たちがそれを受容していくプロセスは，必ずしも外形的に表出されるものではないため，進路決定率で議論することが困難であることはすでに明らかにしてきた［走井 2008, 2010］。同時に，彼らが困難を受容していくプロセスにおいては「自己の能力についての自己認識」が重要になることも明らかにした［走井 2011a,b］。当初の背景としてこれらの動向と研究があったことを指摘することができる。

走井洋一［2008］「キャリア教育の現状と課題」『紀要』，第 44 号，弘前学院大学文学部，pp. 75-89.
走井洋一［2010］「バッファとしての協同の再構築」『協同の發見』，第 221 号（2010 年 10 月），協同総合研究所，pp. 110-114.
走井洋一［2011a］「人間形成における非連続的形式」『プロテウス』，第 13 号，仙台ゲーテ自然学研究会，pp. 45-58.
走井洋一［2011b］「生涯にわたって学習するということ――教育哲学からみた「学習」」『東京家政大学研究紀要（1）人文社会科学』，第 51 集，東京家政大学，pp. 27-35.

2.　研究の目的

本研究は，キャリア形成における目標値・指標の設定とそれに基づく支援プログラムのパイロットケースの開発を目的として実施した。以下それぞれについて詳述する。

⑴　ケイパビリティ概念の教育哲学的検討とそれに基づくキャリア形成の目標値・指標の設定

キャリア形成の目標値・指標については，これまでも「人間力」［人間力戦略研究会 2003］，「基礎的・汎用的能力」［中央教育審議会 2011］などが示されてきた。これらは本田［2008: pp. 51-62］が指摘するように「非認知的で非標準的な，感情操作能力とよぶべきもの」を指標としており，キャリア形成途上の困難の受容という外形化困難な事態と親和性が高いものと捉えられてもきた。そうした捉え方に基づいてキャリア形成支援において意欲を喚起しようとする支援が行われてきたが，こうした支援が移行期に困難を抱えた人たちにとってはさらなる困難を強いる帰結をもたらしうることはすで指摘されているところである［乾 2006］。走井［2011a,b］は「自己の能力についての自己認識」が重要となることを明らかにしたが，これは社会のなかで自己の能力がどのような意味を持ちうるのかを自己認識すること，自己の能力を他者を媒介として自己認識するプロセスそのものを意味している。こうした能力観は，A. センによって提唱された「ケイパビリティ（capability）」概念［Sen 1992=1999, 1999=2000］をもとに，馬上［2006］，宮崎［2009］が M. C. ヌスバウムを援用しつつ提示した個人と社会とを結節する結合的ケイパビリティと通じている。このケイパビリティ概念を上述の文脈に即して捉え直せば，何を有しているのか（＝能力）ではなく，何ができるのか（＝能力の認識）に焦点化されており，この点でキャリア形成上における能力観に決定的な転換を迫るものとして位置づけられうるものである。ただ，この概念はフレームワークとしての妥当性は見出しうるが，実践における具体性を有しているわけではない。それゆえ，この概念の具体的内実を確定していくことでキャリア形成支援において有用性がある目標値・指標として機能することが期待できるが，その手がかりとなるのがディルタイの「生（Leben）」の概念である。ディルタイの生の概念は自己の生と全体的生の結節するものとして示されているだけでなく，具体的な私たちの現実に即して構想されている［走井 2008a, 2010, 2008b］。だとすれば，上述のフレームワークを実践においても機能しうる，より具体性のあるものとする見通しを提供してくれるはずである。ただし，こうした目標値・指標はいうまでもなく，実践によって検証されることが求められている。そのため，この目標値・指標の妥当性の検証を行い，より確度の高いものへと彫琢していく作業を並行して行った。

⑵　キャリア形成支援プログラムのパイロットケースの開発

キャリア形成支援の現場では，どのような支援をしていけばよいのかという根本的かつ切実な問題を抱えている［山崎 2010］。その背景には，目標値・指標が必ずしもキャリア形成の実態に即していないということ，さらにもし実態に即した目標値・指標が見出されたとしてもそれに基づく支援がどのようであればいいのかが判然としない現実があると考えられる。そうした現実をふまえて，実態に即したキャリア形成上の目標値・指標に基づくキャリア形成支援プログラムのパイロットケースとなるものが求められているといってよい。先に示した「自己の能力についての自己認識」を形成していくことを前提した場合，自己の能力をいったん表出し，そ

れを再度自己のうちに取り込むことが求められる［Bolton 1999］。このフレームワークは，ディルタイが示した解釈学的手法としての体験－表現－了解の連関に基本的な着想を得ている。ディルタイは内省による自己理解では十分に自己を知り得ないとして，自己の体験が表出（＝表現）されたものを経由（＝了解）することで自己自身に至りうると考えていた［走井 2010］。だとすれば，先のキャリア形成の目標値・指標に基づくキャリア形成支援プログラムのパイロットケースとしてドラマを用いたプログラムを開発することは十分に有効性があると考えられる。なお，こうした支援プログラムは，例えばしんじゅく若者サポートステーション（以下，新宿サポステ）などのいくつかのサポステにおいて，演劇の手法を用いるなどの形で実施されているが，その検証や適正化はまだ十分に行われていないため，パイロットケースを開発することでこれまでの支援の在り方を検証するだけでなく，これからの支援の指標を示すことができるはずである。

Bolton, G.［1999］ *Acting in the Classroom Drama: A Critical Analysis*, Heinemann Drama.
中央教育審議会［2011］「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について（答申）」.
走井洋一［2008a］「宗教・生・人間形成――ディルタイの宗教観をもとに」『プロテウス』，第 10 号，仙台ゲーテ自然学研究会，pp. 55-72.
走井洋一［2008b］「生の哲学からみた人間形成――ディルタイの生の哲学をもとに」『ヘルダー研究』，第 14 号，日本ヘルダー学会，pp. 83-102.
走井洋一［2010］「人間学的態度に基礎づけられた教育学の構想――ディルタイにおける教育学と人間学」『プロテウス』，第 12 号，仙台ゲーテ自然学研究会，pp. 87-104.
走井洋一［2011a］「人間形成における非連続的形式」『プロテウス』，第 13 号，仙台ゲーテ自然学研究会，pp. 45-58.
走井洋一［2011b］「生涯にわたって学習するということ――教育哲学からみた「学習」」『東京家政大学研究紀要（1）人文社会科学』，第 51 集，東京家政大学，pp. 27-35.
本田由紀［2008］『軋む社会――教育・仕事・若者の現在』，双風舎.
乾彰夫［2006］『不安定を生きる若者たち』，大月書店.
馬上美知［2006］「ケイパビリティ・アプローチの可能性と課題――格差問題への新たな視点の検討として」『教育学研究』，第 73 巻第 4 号，日本教育学会.
宮崎隆志［2009］「ソーシャル・キャピタルとケイパビリティ――移行過程支援との関連で」『社会教育研究』，第 27 号，北海道大学大学院教育学研究院社会教育研究室.
人間力戦略研究会［2003］「人間力戦略研究会報告書――若者に夢と目標を抱かせ，意欲を高める～信頼と連携の社会システム～」.
Sen, A.［1992=1999］ *Inequality Reexamined* ＝セン『不平等の再検討――潜在能力と自由』（池本幸生ほか訳，岩波書店）.
Sen, A.［1999=2000］ *Development As Freedom* ＝セン『自由と経済開発』（石塚雅彦訳，日本経済新聞社）.
山崎英子［2010］「「しんじゅく若者サポートステーション」の若者支援」『協同の發見』，第 221 号，pp. 103-109.

3. 研究の方法

本研究は，キャリア形成プロセスの目標値・指標の設定およびそれにもとづくキャリア形成支援プログラムのパイロットケースの開発を目指すものであるため，理論研究を中核としつつ，調査研究によってその妥当性を補完するかたちで実施した。

理論研究は以下の 2 点についての先行研究を中心に行った。

⑴ キャリア形成についての研究成果の整理・検討
キャリア形成についての先行研究，とりわけ，教育学，心理学，社会学，経済学領域での研究成果を中心に整理し，教育人間学的見地からその体系化を図った。

⑵「ケイパビリティ」概念およびその補完概念としての「生」概念の検討
「ケイパビリティ」概念について，提唱者である A. センはもとより，その継承者の一人である M. C. ヌスバウムについての先行研究を整理・検討した。加えて，「ケイパビリティ」概念が必ずしも実践的なフレームワークにおいて機能するものではないことを踏まえ，それを補完するために，W. ディルタイの「生」の概念についての整理・検討を行った。

調査研究は以下のとおり実施した。

⑴ イギリスにおける社会的排除への支援・キャリア教育の現状調査
イギリス，特にロンドンおよびサンダーランドにおける社会的排除の状況にある人たち（移民，女性，政治犯罪者，障害者，等）と，彼らに対する支援の現状，すなわち，キャリアの形成途上に偶発的契機が生じた人たちがどのように他者や社会とのかかわりを恢復してきたのか，また彼らに対して支援を行っている NPO をはじめとした団体がどのような支援を行ってきたのかについての聞き取り調査を 2012，2015 年度に実施した。

⑵ しんじゅく若者サポートステーションでの調査
「地域若者サポートステーション事業」（厚生労働省）によって運営されている「しんじゅく若者サポートステーション」（以下，「新宿サポステ」と略記）において若者の就労支援における諸問題や支援の現状について，本研究に先立つ研究段階として，2011 年度から，新宿サポステが「東京都若者社会参加応援事業」（東京都）を利用して実施していた「若年無業者のためのパソコン講座――「人っていいなプロジェクト」」（3 ヶ月を 1 タームとする講座を 3 ターム）にアクションリサーチ的に関与し，相談員や講座の講師たちとともに支援のあり方についての検討を行ってきたが，これを 2012 年度も継続し

て実施した。

⑶ 生活困窮者自立支援制度のモデル事業における調査

2013 年 12 月に生活困窮者自立支援法が成立し，2015 年 4 月から同法にもとづく支援制度が開始されたが，それに先立って実施された「平成 25 年度　セーフティネット支援対策等事業費補助金社会福祉推進事業　社会的事業体が取り組む就労準備事業から持続性のある中間的就労創出に向けた制度・支援に関する調査研究」，「平成 26 年度　セーフティネット支援対策等事業費補助金社会福祉推進事業　地域協働による多元的・多層的な就労支援・社会的居場所創出ネットワーク構築に関する調査研究」（いずれも一般社団法人協同総合研究所が受託）において，当事者のヒアリングを中心に就労支援の在り方についての調査を行った。

4.　研究の成果

キャリア形成の目標をどのように設定するのか，そしてまた，それへの支援をどのように行うのかについて，必ずしも一義的には定式化できるものではないが，調査研究を含めた本研究においては，以下のような見通しを得ることができた。

まず第 1 に，コミュニティとの関係の編み直しの必要性である。就労に至らないケースにおいて，U. ベック［1986=1998］が指摘した「個人化」が進行していること，そして，そのゆえに，いわゆる社会関係資本が弱体化，ないしは消失した状況があることが明らかになった。個人化は社会的な問題が個人に帰されることにほかならないが，それを克服する 1 つの道筋は，コミュニティとの関係の編み直しに見出すことができた。このことは，生活困窮者自立支援事業における取り組みにおいて明らかにされてきたことであるが，個人化という現象が，住まっている場所から私たちが剥奪されることを意味する。しかしながら，私たちはそこに物理的には住み続けていることからその事実に気づかずにいるのである。O. F. ボルノーが「住まう（wohnen）」ことについて，「空間への素朴な全面的信頼」，「故郷喪失性」，「家屋の建設によるやすらぎの回復」，「人為的につくりだされ，つねに欺瞞的なものでしかないやすらぎの，それ自身のなかで硬直化して外観をこえて，素朴な空間性がより高い水準で回復される別の，開かれているやすらぎに到達する」段階としてとらえているように，個人化が「故郷喪失性」の段階であるとすれば，就労支援によっていったんやすらぎを得るものの，それは本来的な意味でのやすらぎではないため，持続的な「住まう」ことへの徹底が求められることにほかならない。このことは，生得的な自己認識の範囲である人称的な「わたしたち（weness）」［Tomasello 2009=2013］を超えて，非人称的な「わたしたち」に拡大することにも通じていると考えてよい。

第 2 に，私たちに生起するのは，「自己の能力についての自己認識」の変容を自己自身が認識するだけでなく，他者によっても認識され，受容されることの重要性である。これまで就労支援は，非就労から就労へという図式で理解されてきたが，近年，それを接続する場として中間的就労という場が提案され，実際に実践も行われている。しかしながら，中間的就労の場に，非就労から就労へのバッファ的な機能があることは否定できないとしても，非就労→中間的就労→就労という図式自体は，結局のところ，非就労を個人の心性に帰そうとする個人化の枠組みを出るものではない。そのため，中間的就労自体を就労の場として構築する社会的就労の場が求められるといえる。実際，いくつかの先進的事例において見出されたところであるが，それぞれがそれぞれの力を発揮することで機能する社会的就労の場は，自らの能力が発揮されていることを自己認識するとともに，そのことが同じまで働く他者からも認めら得ることになる。つまり，「自己の能力についての自己認識」の変容は，必ずしも自己のみにおいて生起するのではなく，自己の能力についての自己の認識と他者の認識が相乗的に変容していくこと，すなわち，自己と他者との協同によって生起することが明らかになったといえる。

そして，第 3 にこのような自己の能力についての自己の認識と他者の認識が相乗的に生起するには，そこにその認識を共有するための「語ること」が必要であることである。「語ること」は当然のことながら言葉を用いることになるが，直接知覚困難なもの／ことについて言葉はその人の社会的環境に依存することになる［今井 2010］。すなわち，近く不可能な領域については言葉が世界を構成すると考えてよい。このことは，自己の能力についての認識において大きな意味をもつ。なぜなら，自己の能力が直接知覚困難なものであるからこそ，それを肯定的に捉えるのか否かを決定するのはそれまでの学習に左右されることになるからである。だとすると，自らの認識を自らの世界を構成する言葉によって「語ること」によって，また，別の世界を構成する言葉を用いる他者によって「語られること」によって，そ

して，そうした互いの「語り」が互いの世界を揺さぶることによって，私たちは自己の能力についての自己認識を更新していくことが可能となる。

Beck, U.［1986=1998］ *Risikogesellscahft: Auf dem Weg in eine andere Moderne* ＝ベック『危険社会――新しい近代への道』（東廉ほか訳，法政大学出版局）.
今井むつみ［2010］『ことばと思考』，岩波新書，岩波書店.
Tomasello, M.［2009=2013］ *Why We Cooperate* ＝トマセロ『ヒトはなぜ協力するのか』（橋彌和秀ほか訳，勁草書房）.

5.　主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 5 件）

⑴ 走井洋一，「キャリア形成上の偶発的契機とその受容」，『東京家政大学紀要（1）人文社会科学』，査読有，第 53 号，2013 年，23-29 頁

⑵ 走井洋一，「ディルタイにおける教育の根本問題としての自然と歴史――進化論的心理学の知見を手がかり――」，『ディルタイ研究』，第 24 号，査読無，2013 年，56-72 頁

⑶ 走井洋一，「言語活動と社会性の形成」，『東京家政大学　人間文化研究所紀要』，第 7 集，査読無，2013 年，81-89 頁

⑷ 走井洋一，「生の全体性とキャリア形成」，『教育思想』，第 41 号，査読無，2014 年，1-16 頁

⑸ 走井洋一，「コミュニティという場所――労協・但馬地域福祉事業所の取り組みから――」，『協同組合研究』，第 33 巻第 2 号，査読無，2014 年，10-15 頁

〔学会発表〕（計 7 件）

⑴ 走井洋一，「生の全体性とキャリア形成」，教育哲学会第 55 回大会一般研究発表，2012 年 9 月 16 日，早稲田大学

⑵ 走井洋一，「ディルタイ思想の教育学的アクチュアリティ～現代の心理学からの応答～」，日本ディルタイ協会研究発表，2012 年 12 月 1 日，グランベル市ヶ谷

⑶ 走井洋一，「コミュニティという場所――労協・但馬地域福祉事業所の取り組みから――」，日本協同組合学会第 33 回大会個別論題報告，2013 年 10 月 5 日，明治大学

⑷ 走井洋一，「道徳の時間における話し合いの限界と可能性――熟議民主主義の議論をもとに――」，日本道徳教育学会第 82 回大会自由研究発表，2013 年 11 月 3 日，札幌国際大学

⑸ 走井洋一，「ヒトによる「協同」の限界と可能性――協同組合の人間学的基底――」，日本協同組合学会第 34 回大会個別論題報告，2014 年 10 月 25 日，愛媛大学

⑹ 走井洋一，「人間における志向性の共有とそこから導かれる道徳教育の可能性」，日本道徳教育学会第 84 回大会自由研究発表，2014 年 11 月 30 日，高知大学

⑺ 走井洋一，「共感にもとづく協同的空間の構築と道徳教育の可能性」，日本道徳教育学会第 86 回大会自由研究発表，2015 年 11 月 22 日，岡山大学

〔図書〕（計 1 件）

⑴ 笹田博通編，走井洋一ほか著，『教育的思考の歩み』，2015 年，ナカニシヤ出版，256 頁

6.　研究組織

⑴ 研究代表者
走井洋一（HASHIRII, Yoichi）
東京家政大学・家政学部・教授
研究者番号：30347843

⑵ 研究分担者
該当なし

⑶ 連携研究者
宮崎隆志（MIYAZAKI, Takashi）
北海道大学・教育学研究院・教授
研究者番号：10190761

大高研道（OTAKA, Kendo）
聖学院大学・政治経済学部・教授
研究者番号：00364323

馬上美知（OTAKA, Kendo）
川村学園女子大学・教育学部・准教授
研究者番号：60364478

⑷ 研究協力者
熊倉ゆりえ（KUMAKURA, Yurie）